

宮澤賢治「注文の多い料理店」の語用論的解釈

松 繁 弘 之*

1. はじめに

「注文の多い料理店」は宮澤賢治(1896～1932)が1924(大正13)年に刊行した童話集『注文の多い料理店』に収録されてゐる。童話集のタイトルにもなつてゐるこの童話は賢治の代表的な童話として広く読まれてゐる。

ところで、天沢(1994)に収録されてゐる「『注文の多い料理店』の広告チラシ」(55頁)には「可愛い御子様方の秋の読物として御父さん御母さんに是非おすゝめ致します。」と書かれてゐることから、小学生や中学生(「少年少女期の終り頃から、アドレセンス中葉」)に読まれることが想定されてゐることが分かる。しかしながら、この童話に関していへば、大人であつても一読して理解できるやうな童話とは思はれず、「なんだか、わけのわからないところ」ばかりの童話となつてゐるのではないかと思はれる。なぜなら、一般に童話は幼児にも理解できるやうに単純な言語表現によつて書かれることが多いが、この童話は言語表現が複雑であり、その点で読解することが困難な作品であると思はれるからである。

この童話について従来さまざまな解釈がなされてゐるが、管見の限り言語表現に基づく統一的な解釈がなされてゐないやうに思はれる。したがつて、本稿は言語表現に焦点を当て、それが複雑に構成されてゐることを示し、その上で統一的に解釈することを目的とする。

そのために言語学の語用論の理論を援用する。具体的にいへば、グライスの「協調の原理」の格率に基づいて本文を分析し、主人公たちの発話を解釈する。

結論として、この作品がスノビズムへの風刺をテーマとした童話であり、ブラックユーモアの表現に工夫が凝らされてゐることを明らかにする。

以下、まづ方法について紹介し、次に概要と主人公について述べ、そして本文を分析・解釈する。(引用に際し、表記を改めた場合がある。また、引用末尾に引用開始頁を記す。)

*人文学部非常勤講師—日本語学

2. 分析の方法

方法として援用するグライスの「協調の原理」について簡単に紹介する。グライス (1998) によれば、「協調の原理」は次のやうである。

「会話の中で発言をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。これを協調の原理 (Cooperative Principle) と呼ぶことができる。」 37

つまり、会話は話し手と聞き手とが協力し合つて行はれるものである。そして、これには具体的な「格率」がある。

「いまこういった一般原理が満足のいくものと仮定しよう。この協調の原理にかなう結果を生じさせるためには一定のより特定の格率や下位格率に従わなければならないが、それらはおそらく四つの異なるカテゴリーの下に分類できるだろう。カントにならつて、これらのカテゴリーを量、質、関係、様態と呼ぶ。」 37

「量のカテゴリーは提供されるべき情報の量に関係し、そこには次のような格率が属している。

- 1 (言葉のやり取りの当面の目的のための) 要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい。

- 2 要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない。」 37

「質のカテゴリーの下に属するのは一つの上位格率 —— 『真なる発言を行うようにしなさい』 —— と、次の二つのより特定の格率である。

- 1 偽だと思ふことを言ってはならない。

- 2 十分な証拠のないことを言ってはならない。」 38

「私が関係のカテゴリーの下に置くのはただ一つの格率、『関連性のあることを言いなさい』である。」 38

「最後に、様態のカテゴリー（これは私の考えでは、先の諸カテゴリーと違って、言われた事柄ではなく、その言われ方に関係する）に属するのは、『わかりやすい言い方をしなさい』という上位格率と、次のような多様な格率である。

- 1 曖昧な言い方をしてはならない。

- 2 多義的な言い方をしてはならない。

- 3 簡潔な言い方をしなさい（余計な言葉を使つてはならない）。

- 4 整然とした言い方をしなさい。」 38

要するに、会話において四つのこと、即ち、

- ①適切な情報量でなければならない（量のカテゴリー）、
- ②嘘や偽りであつてはならない（質のカテゴリー）、
- ③関連性のある内容でなければならない（関係のカテゴリー）、
- ④聞き手に理解しやすい言ひ方をしなければならない（様態のカテゴリー）、

といふことが要請されてゐるのである。

このような格率が遵守されるならば、効率のよい伝達が可能となる。例へば、ニュースなどの言語伝達などである。しかし、日常生活においては、思つてゐることを有りのままに率直に発話するといふことは対人的あるいは社会的な配慮から制限されるのが普通である。したがつて、発話は故意に非効率的にされることになる。その場合、この格率は遵守されず、意図的に違反されるのである。そして、この違反の意図は「発話の含み」として解釈されることになる。

換言すれば、発話とその意図とは必ずしも一義的には対応しないといふことである。その対応を理解するためには、グライス（1998）に、

「ある特定の会話の含みが存在していることを割り出すために聞き手が依拠するのは次のようなデータである。(1) 使用された語の慣用的意味と、語の使用に指示が伴っているときにはその指示対象の確認、(2) 協調の原理と格率、(3) 発話の言語的その他のコンテキスト、(4) その他の背景的知識、(5) 会話の参加者はどちらも、上記の項目に収まるすべての関連事項を手に入れることができ、しかもそうであることを双方が知っている（あるいは仮定している）、という事実（またはそれが事実だという推定）。」45

とあるやうに、発話の字義的な意味のみではなく、発話された状況や背景的知識なども必要であることに注意すべきである。以下、この格率を用ゐて解釈を行ふ。

3. 概要と主人公

この作品の概要をいへば、「東京から来た若い紳士二人が、ガイドの猟師とともに狩猟にでかけるが、山奥で猟師と逸れて遭難する。空腹になつて山猫の料理店へ入り、多くの『注文』をされるが、危ないところで猟師に救はれる。」となる。

この作品の要点は、主人公である若い紳士二人が多くの「注文」に対して途方もない解釈をすることである。そこでまづ、主人公の特徴について検討しておかなくてはならない。

主人公の登場シーンは次のやうになつてゐる。

「二人の若い紳士が、すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかゝ、する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉がかさゝしたところを、こんなことを云ひながら、あるいてをりました」28

このやうに主人公たちは「だいぶ山奥」を「イギリスの兵隊のかたち」をして狩猟をしようとしてゐる。読者はこのやうに仮装した人物をイメージするだけで失笑するのではなからうか。また、ガイド役の猟師が「蓑帽子をかぶつた専門の猟師」(37頁)とあるやうに、日本的であるのに対比することでその滑稽さは増すであらう。

そして、このやうなファッション同様、主人公の性格あるいは判断力が常軌を逸したものであることが次の言動によつて明らかにされる。

「それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごつて、どこかへ行つてしまつたくらゐの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のやうな犬が、二匹いつしよにめまひを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまひました。

『じつにぼくは、二千四百円の損害だ』と一人の紳士が、その犬の目ぶたを、ちよつとかへしてみても言ひました。

『ぼくは二千八百円の損害だ。』と、もひとりが、くやしさに、あたまをまげて言ひました。』28

ここでは、主人公が遭難の危険に陥つてしまつたこと、つまり第一にガイドの猟師と逸れてしまつたこと、第二に「白熊のやうな犬」が死んでしまつたこと、が描かれてゐる。(ただし、犬は「死んでしま」つたと書かれてゐるが、本文の最後では死んでゐないことになつてゐる。これは、犬が氣を失つて仮死状態となつてゐただけであり、その後ガイドの猟師が犬を発見して蘇生させたといふやうな文脈を想定しなければ矛盾した展開となる。)しかし、主人公たちは自らの生命が危機に直面してゐることを全く理解せず、犬の死を「損害」としてしか把握してゐない。つまり、犬は嗅覚によつて道に迷ふことはないから、犬が生きてゐれば遭難することはないが、その犬が死ぬと都会の素人のハンターは確実に遭難するであらう。普通ならパニックになるやうな状況下で、「損害」の額で見栄の張り合ひをするといふ非常識な行動をしてゐる。そして、その「損害」の額が「二千四百円」と「二千八百円」といふ途方もない額であることで、読者は失笑するであらう。

(なほ、天沢(1994)には、『注文の多い料理店』の巻末に刷り込まれた『春と修羅』他の広告』が掲載されており、そこに、

「心象スケッチ 春と修羅 作者宮澤賢治氏

綿布製四六版三百頁 函入一定價貳圓四拾錢」54

とあり、また年譜の記事、即ち、

「大正十三年（一九二四）

二十八歳

…四月、心象スケッチ『春と修羅』一千部を関根書店から自費出版。」107

とあるやうに、この死んだ犬の値段は賢治が自費出版した詩集『心象スケッチ 春と修羅』一冊の値段の千倍であり、自費出版の総額である。）

さらに、主人公たちの状況判断がいかに誤つてゐるかが次のやうに述べられる。

「はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、ぢつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云ひました。

『ぼくはもう戻らうとおもふ。』

『さあ、ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもふ。』

『そいぢや、これで切りあげやう。なあと戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買つて帰ればいゝ。』

『兎もでてゐたねえ。さうすれば結局おなじこつた。では帰らうぢやないか』

ところがどうも困つたことは、どつちへ行けば戻れるのか、いつかう見当がつかなくなつてゐました。」28

ガイドの獐師も犬もなく、どうして「戻らう」と思つたり「帰らう」と思つたりできるのであろうか。しかし主人公たちにとつてそのやうなことは一切頭になく、ただ「山鳥」を「拾円も買」ふことで、獲物が一匹も獲れなかつたことを誤魔化し見栄を張ることだけを気にかけてゐるのである。このやうに繰り返される主人公たちの虚栄は読者の嘲笑を買ふだけであらう。そして、当然であるが二人は遭難し、途方に暮れるのである。

ところが、この直後に途方もないことが起こるのである。

「その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

といふ札がでてゐました。

『君、ちやうどいゝ。こゝはこれでなかなか開けてるんだ。入らうぢやないか』
 『おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう』
 『もちろんできるさ。看板にさう書いてあるぢやないか』
 『はいらうぢやないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れさうなんだ。』 29

つまり、ガイドの猟師が「まごつい」てしまふほどの山奥に、突如として「立派な西洋造りの家」が出現するのである。読者は主人公たちがそれを発見して全く驚かないことに驚くであらう。そして、「なかなか開けてるんだ」といふ発言によつて失笑するであらう。なぜなら、「開けてる」といふのは「都会のやうに繁華な所である」といふことであるが、ここは遭難してしまふほどの山奥であるからである。また、その発言をする際の推論は論理的にも誤つてゐるからである。その推論とは、

（順：○）都会である。 → レストランがある。

（逆：×）レストランがある。 → 都会である。

といふ推論である。つまり、主人公は「都会であれば、レストランがある。」といふことから、その「逆」の「レストランがあれば、都会である。」といふ推論をしてゐるが、「逆」は必ずしも正しいとは限らないからである。

以上のやうな主人公の特徴を一言でいへば、スノップであるといへよう。スノップとは小西・南出（2001）に、

「snob 1 スノップ、俗物《社会的地位が下の人をばかにし、地位や財産などを崇拜する上流気取りの人》

2 「限定語句の後で」学問や知識を鼻にかける人」1769

とあるやうに、地位や財産を崇拜し、知識を鼻にかける人物である。この作品において主人公たちは非常識で判断力に欠けるスノップの典型として戯画的に表現されてゐるといへよう。

4. 分析と解釈

本文の分析と解釈を行ふが、そのためには、まづ「注文」の作成者とその目的に関して知る必要がある。それは次の一節から分かる。

『『だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないやうだよ。』

『あたりまへさ。親分の書きやうがまづいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうる

さかつたでせう、お気の毒でしたなんて、間拔けたことを書いたもんだ。』」 36

即ち、山猫には親分と子分がをり、その親分が「注文」を作成したこと、また、その「注文」は主人公たちを誘導することを目的としてゐること、が分かる。

さうすると、「注文」は作成者の立場から解釈する場合と主人公たちの立場から解釈する場合とでは大きく異なるといへよう。なぜなら、山猫は主人公を欺かうとしてをり、「協調の原理」に違反する意図が初めからあるからである。

その「注文」は七つの扉の表と裏（ただし最後の扉は表のみ）に書かれてゐる。以下、それぞれについて、両者の立場を反映した意味をできるかぎり区別し、それを対照する。また、読解において注意すべき点も指摘する。

(1a) 第一の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

そして硝子の開き戸がたつて、そこに金文字でかう書いてありました。

『どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません』

二人はそこで、ひどくよろこんで言ひました。

『こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてゐるねえ、けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこんないゝこともある。このうちは料理店だけれどもたゞでご馳走するんだぜ。』

『どうもさうらしい。決してご遠慮はありませんといふのはその意味だ。』」 30

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「遠慮」といふ表現が多義であるからである。

「遠慮」は松村（2006）によれば次のやうにある。

「遠慮 ①他人に対して、控え目に振る舞うこと。言動を控え目にすること。…

「遠慮なく」の形で相手を誘ったり、相手からの勧めに応じたりする場合にも用いる。「一なく召し上がれ」「一なくあがらせていただきます」]

②（事情や状況を考え合わせて）やめること。辞退すること。

「遠慮してほしい」「御遠慮ください」などの形で相手に対して退去や行為の中止を求める場合にも用いる。「しばらく一してほしい」「おタバコは御遠慮ください」] …

③断ることの遠回しな言い方…」 299

つまり、「遠慮」は一方では控え目にすることや気兼ねすることを意味し、他方では止めることや拒絶することを意味する。また、ここでは「遠慮なく」が丁寧に表現されてゐる（つまり「遠慮」は「ご遠慮」に、また「ない」は「ありません」）ことに注意すべきである。それにより、控え目にすることや気兼ねすることの意味で用ゐられてゐると解釈されやすくなるからである。

主人公たちも、この意味で理解し、「どなたもお入りください。お気兼ねなく。」と理解し、さらに「気兼ねなく」といふことを「気兼ねなく召し上がれ」、つまり「たゞでご馳走する」といふことであると解釈してゐる。ここで、読者は「料理店が無料でご馳走する」といふ主人公たちの非常識な発想に対して失笑せずにはをれないであらう。そして、結局、主人公たちが山猫に自分たち自身を無料でご馳走することになつて抱腹することであらう。

（なほ、「こんどはこない、こともある。このうちは料理店だけれどもたゞでご馳走するんだぜ」といふ発話は、ご馳走することを意味する英語の treat と関係があるのではないかと思はれる。即ち、木原（2000）によれば、

「treat〔動〕（他）…③〔人〕にごちそうする；〔人〕におごる…
〔名〕 ①（特に思いがけない）うれしい〔楽しい〕事
②おごる番、おごり」1516

とあるやうに、それはご馳走することと思いがけない嬉しい事とを意味してゐるからである。）

他方、注意書きの作成者である山猫の親分の意図は主人公たちを誘い込むことであるので、「遠慮」はお断りの意味であるといへよう。したがつて、「どなたもお入りください。どなたでもお断りすることはありません。」を意図してゐると解釈できよう。

（1b）第一の扉の裏の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「…硝子戸の裏側には、金文字でかうなつてゐました。
『ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします』
二人は大歓迎といふので、もう大よろこびです。
『君、ぼくらは大歓迎にあたつてゐるのだ。』
『ぼくらは両方兼ねてるから』」30

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、量のカテゴリーの格率と様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、量のカテゴリーでは、「肥つたお方や若いお方」を歓迎する理由が書かれてゐないからである。また、様態のカテゴリーでは、「歓迎」

といふ表現が多義であるからである。

「歓迎」の多義は、welcome を参考にすると明瞭になるであらう。木原（2000）によれば次のやうにある。

「welcome〔形〕①〔客などが〕歓迎される、喜んで迎えらるる

②ありがたい、けっこうな…」1616

つまり、「歓迎」は一方では喜んで迎へることを意味し、他方ではありがたいものであることを意味する。

主人公たちは「歓迎」を喜んで迎へることであると理解し、自分たちが歓迎されると解釈した。その際、なぜ「肥つたお方や若いお方」が歓迎されるものであるのかの理由については考へることをせず、自分たちがさうであるから喜ぶだけである。

他方、山猫の意図からすれば「歓迎」はありがたいものであると解釈できよう。その際、表の注意書きの文脈を加へることで、その意図は理解しやすいものとならう。即ち、「だれでもお断りせず歓迎しますが、特に肥つた方や若い方であれば大変嬉しいですよ。」といふことが意図されてゐるといへる。つまり、望ましい客の条件あるいは希望を挙げることが意図されてゐるといへよう。要するに、山猫は脂肪が多い肉や、柔らかい肉が好みなのである。これこそ、客に注文を付けてゐるのである。

以上をまとめると、次の表になる。

表1 第一の扉の注意書き

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
どなたもどうかお入りください。 決してご遠慮はありません	様態	どなたでもお入りください。 遠慮なく召し上がれ。	どなたでもお入りください。 どなたでもお断りすることはありません。
ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします	量 様態	自分たちのやうな客は喜んで迎へられる。	脂肪の多い肉や柔らかい肉が大好物です。

(2a) 第二の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

『どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。』

『これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなかうさ。』

そして二人はその扉をあけやうとしますと、上に黄いろな字でかう書いてありました。

『当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください』

『なかなかはやつてゐるんだ。こんな山の中で。』

『それあさうだ。見たまへ、東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだらう』30

ここで注意すべきことが二つある。

第一に、主人公の一人が「たくさん戸がある」と言つてゐることである。この扉は二つ目の扉なので「たくさん」といふのはおかしい。おそらく賢治が作者の立場から主人公に言はせたものと思はれる。

第二に、「たくさん戸がある」ことについて、もう一人が「ロシア式」とあると言つてゐることである。西洋建築の場合、玄関の扉を開いて中に入つたとしても、各部屋にはそれぞれ扉があることは不思議ではない。したがつて、「寒いところや山の中」でなくても「変な家」ではない。かうして、主人公は「ロシア式」といふ知識をひけらかしてみたものの却つて無知をさらけ出し、読者の笑ひを誘ふことになる。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「注文」と「承知」とが多義であるからである。

「注文」は、木原（2000）によれば、

「order〔名〕⑤（しばしば orders）命令，指図，指令

⑥注文；注文書；（集合的に）注文品；（レストランでの）注文（料理）」

975

とあり、ここでは命令とメニューのオーダーとを意味する。また、「承知」は松村（2006）によれば、

「承知 ①知っていること。わかっていること。…

②聞き入れること。承諾すること。…

③許すこと。多く否定の形で「許さない」「勘弁しない」の意を表す。…」1237

とあり、ここでは知っていることと許すこととを意味する。

主人公たちはレストランであることから「注文」をメニューのオーダーと理解し、また告知のための文言であることから「承知」を知つてゐることと理解して、「この料理店はメニューのオーダーが多く繁盛してゐることを知つておいて下さい」と解釈したといへよう。

他方、山猫の意図からすれば、主人公たちに西洋料理（サラダ）となつてもらふことになるので、「注文」は命令を意味し、「承知」は許すことを意味する。したがつて、「この料理店は命令することが多いですが、許して下さい」と解釈できよう。

(2b) 第二の扉の裏の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「二人は云ひながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

『注文はずゐぶん多いでせうがどうか一々こらえて下さい。』

『これはぜんたいどういふんだ。』ひとりの紳士は顔をしかめました。

『うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういふことだ。』

『さうだらう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。』

『そしてテーブルに座りたいもんだな。』 31

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「注文」と「こらえて」とが多義であるからである。

「注文」については上述した通りである。「こらえる」について、松村（2006）によれば、

「こらえる ①苦しみ・痛みなどをがまんする。…

②悲しみ・苦しみ・怒りなどの感情や欲求が表面に出ようとするのをおさえる。…

③外から加えられる力に負けないように保つ。もちこたえる。…

④処罰したり、しかったりすべきところを、許す。堪忍する。…」 951

とあり、ここでは我慢することと許すこととを意味する。

主人公たちは表の注意書き同様に「注文」をオーダーと理解し、「こらえる」を許すことと理解し、「オーダーがあまり多くて支度が手間取るけれども許して下さい」と解釈した。

他方、山猫の意図からすれば、表の注意書き同様に「注文」は命令を、「こらえる」は我慢することを意味するので、「命令は多いのですが、我慢して従つて下さい」と解釈できよう。

以上をまとめると、次の表になる。

表2 第二の扉の注意書き

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
当軒は注文の多い料理店で すからどうかそこはご承知 ください。	様態	この料理店はオーダーが多 く繁盛してゐることを知つ ておいて下さい。	この料理店は命令すること が多いのですが、許して下 さい。
注文はずゐぶん多いでせう がどうか一々こらえて下さ い。	様態	オーダーが多いので、料理 の準備に時間が掛かります が許して下さい。	命令することが多いのです が、我慢して従つてくださ い。

(3a) 第三の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかゝつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

『お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それからほきものゝ泥を落してください。』と書いてありました。

『これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ』

『作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。』

そこで二人は、きれいに髪をけづつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そ〔い〕つがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中へ入つてきました。

二人はびつくりして、互によりそつて、扉をがたと開けて、次の室へ入つて行きました。早く何か暖かいものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになつてしまふと、二人とも思つたのでした。」 31

ここで注意すべきことは三つある。

第一に、「どうもうるさいことは、また扉が一つありました」と書いてゐることである。上述したやうに、「たくさん戸がある」ことについて「ロシア式」であると主人公たちは納得してゐるのであるが、作者が読者に対して「また扉がある」ことを「どうもうるさい」と解説してゐるといへよう。

第二に、「山のなかだとおもつて見くびつた」と言つてゐることと「偉い人たち」と言つてゐることである。これはスノップの発話そのものであり、主人公たちは相手が自分たちより社会的地位が下であれば見下し、自分たちより上であれば取り入らうとする俗物であることが明らかになつてゐるといへよう。

第三に、「暖かいものでもたべて、元気をつけて置かないと」と書いてゐることである。これはレストランの語源と関係があると思はれる。即ち、木原（2000）によれば、「restaurant〔語源〕フランス語で、『元気を回復させる（restore）場所』の意味。」（1182 頁）とあり、ブラシが消失するといふやうな超常現象を目にしても主人公たちが逃げ出さうとしないのは、レストランが元気を回復させる場所であるからといへよう。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、関係のカテゴリーの格率と量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、関係のカテゴリーについていへば、「髪をきちんと」することと食事との関連性が不明であり、「はきものゝ泥を落とす」のであれば玄関の注意書きであれば関連性があるが、第三の扉では関連性が不明であるからである。また、量のカテゴリーについていへば、その理由が書かれてゐないからである。

主人公たちは「注文」を命令とは理解してゐないので、ここでは命令されてゐることに気づかず、関連性を想定して「作法の厳しい家」だと解釈し、また、その理由を「偉い人たちが、たびたび来る」からであると考えてゐる。

他方、山猫の意図からすれば、これが一つ目の命令であり、食材の下準備として汚れを落としてもらふことである。

(3b) 第三の扉の裏の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「扉の内側に、また変なことが書いてありました。

『鉄砲と弾丸をこゝに置いてください。』

見るとすぐ横に黒い台がありました。

『なるほど、鉄砲を持つてものを食ふといふ法はない。』

『いや、よほど偉いひとが始終来てゐるんだ。』」 32

ここで注意すべきことは三つある。

第一に、「また変なことが書いてありました」と書いてゐることである。上述したやうに、主人公たちは礼儀正しくしなければならないと納得してをり、「変なことが書いてあ」とは考へてゐないので、これもまた作者が読者に対して「変なことが書いてあ」と解説してゐるといへよう。

第二に、「鉄砲を持つてものを食ふといふ法はない」と言つてゐることである。「法」は、表の注意書きに対して「作法の厳しい家だ」と発話してゐることから、マナーを意味してゐるといへる。したがつて、「鉄砲を持つてものを食ふ」ことはマナーに反すると主人公のひとりとは発話してゐると解釈できる。これは知識をひけらかして教養のあることを誇示してゐることであるといへよう。スノッブ的発話である。

第三に、表の注意書きの場合と同様に「偉いひと」と言つてゐることである。これもスノッブ的発話である。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、関係のカテゴリーの格率と量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、関係のカテゴリーでいへば、所持品である鉄砲と弾丸を置くことと食事との関連性が不明であるからである。また、量のカテゴリーでいへば、その理由が述べられてをらず不明であるからである。

主人公たちはスノッブ的発想から注意書きを「マナーに従つて鉄砲と弾丸を置く」必要があると解釈した。

他方、山猫の意図は、主人公たちから鉄砲を奪い取ることである。なぜなら、もし主人公たちが気が付き、反撃するときに鉄砲を使用すると危険であるからである。

以上をまとめると、次の表になる。

表3 第三の扉の注意書き（命令①、命令②）

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
命令①：お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それからきもの、泥を落してください。	関係量	偉い人が何度も来るから身なりを整へなくてはならない。	食材の下準備：汚れを落して下さい。
命令②：鉄砲と弾丸をこゝに置いてください。	関係量	偉い人がいつも来るからマナーに従はなくてはならない。	食材の下準備：身を守るためのものを置いて下さい。

(4a) 第四の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「また黒い扉がありました。

『どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。』

『どうだ、とるか。』

『仕方ない、とらう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは』

二人は帽子とオーバコートで釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。」³²

ここで注意すべきことは、第三の扉の場合と同様であるので、表現が簡略になつてゐることである。したがつて、「帽子と外套と靴」を脱ぐことがマナーであると主人公たちは考へてゐるといへよう。しかし、読者は「靴」を脱ぐことはマナーではないと気づくので、主人公たちのマナーについての知識が中途半端なものであることが分かる。また、「えらいひと」が「奥に来てゐる」と思つてゐることである。第三の扉で、この料理店には偉い人が「たびたび来るんだ」から「始終来てゐるんだ」へとなつてゐたが、ここでは今まさに「奥に来てゐる」と思ふやうになつてゐることである。

(なほ、「また黒い扉がありました」とあるが、第三の扉と同様に黒い扉といふ意味か、更に扉があつたといふ意味かは不明である。なぜなら、第三の扉の色が不明であるからである。)

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、関係のカテゴリーの格率と量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、第三の扉と同様であるからである。

主人公たちはスノップ的発想から「マナーに従つて帽子と外套と靴を脱がなくてはならない」と解釈した。

他方、山猫の意図は、体（肉）を包んでゐる帽子や外套や靴などは食べられないから、主人公たちに脱いでもらふことであるといへよう。

(4b) 第四の扉の裏の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「扉の裏側には、

『ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、

ことに尖つたものは、みんなこゝに置いてください』

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添へてあつたのです。

『は、あ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気のものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯う云ふんだらう。』

『さうだらう。して見ると勘定は帰りにこゝで払ふのだらうか。』 32

ここで注意すべきことは二つある。

第一に、マナーについての知識に代はつて「電気」について知識をひけらかしてゐることである。読者は料理に電気を使ふといふ非常識な発想に失笑せざるをえず、特に尖つてゐるのが電気を使ふ場合に危険であると考えるのは避雷針のやうなものを想定してゐるからであると理解して抱腹するであらう。

第二に、「勘定は帰りにこゝで払ふ」と言つてゐることである。これは主人公たちが玄関のところで「ただでご馳走する」と言つて喜んでゐることと矛盾してゐる。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、関係のカテゴリーの格率と量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、装飾品を取ることと食事との関連性が不明であり、その理由も述べられてゐないからである。

主人公たちは「電気」の知識によつて「料理で電気を使ふから金属製のものを身につけてゐると危険である」と解釈した。この際、マナーについての知識は考慮されてゐない。

他方、山猫の意図は、金属製のものは食べることはできず、特に尖つたものは口を傷つけるので、主人公たちに外してもらふことであるといへよう。

以上をまとめると、次の表になる。

表 4 第四の扉の注意書き（命令③、命令④）

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
命令③：どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。	関係量	偉いひとが来てゐるのでマナーに従はなくてはならないから、帽子とコートと靴を取つて下さい。	食材の下準備：食べることのできないものは取り外して下さい。
命令④：ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖つたものは、みんなこゝに置いてください	関係量	料理に電気を使ふので金属製のものを身につけてゐると危険なので置いて下さい。	食材の下準備：口の中を傷つける可能性のある尖つたものは取り外して下さい。

(5a) 第五の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。

『壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗ってください。』

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

『クリームをぬれといふのはどういふんだ。』

『これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖かいとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。』」 33

ここで注意すべきことは三つある。

第一に、「牛乳のクリーム」であると明示してゐることである。これは作者が読者に対して解説してゐるといへよう。即ち、主人公たちがそれを「喰べ」ることができることを前もつて説明してゐるのである。

第二に、「クリーム」についての知識をひけらかしてゐることである。保湿クリームは乾燥を防ぐために塗るのであるから、乾燥する場所で塗るのが常識であり、「室のなかがあんまり暖かいとひびがきれる」といふのは全く逆である。このやうな明白に誤つた知識を得意げに言つてゐることに読者は失笑するであらう。

第三に、「貴族」と言つてゐることである。「偉いひと」といふのは「貴族」といふことで、主人公たちの階級意識とその俗物根性が露はになる。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率と関係のカテゴリーの格率と量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、様態のカテゴリーでは、「クリーム」が多義であり、木原（2000）によれば、

「cream〔名〕①クリーム（牛乳の上層に浮く脂肪分：バターなどの原料）

...

③（化粧、荒れ止め、つや出し用などの）クリーム」 300

とあり、食用のクリームと荒れ止め用のクリームの意味がある。また、関係のカテゴリーと量のカテゴリーでいへば、クリームを塗ることと食事との関連性が不明であり、その理由も書かれてゐないからである。

主人公たちはクリームを料理店の主人の好意と見なし、荒れ止め用のクリームと理解し、「室内が暖かいからひび予防のためにクリームを塗らなくてはならない」と解釈した。

他方、山猫の意図は、主人公たちに食用のクリームを塗つて味をつけてもらふことである。

(5b) 第五の扉の裏の注意書きは次のように書かれてゐる。

「それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

『クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、』

と書いてあつて、ちいさなクリーム of 壺がこゝにも置いてありました。

『さうさう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだつた。こゝの主人はじつに用意周到だね。』

『あゝ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下ぢや仕方ないね。』 33

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、量のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「耳にもよく塗」ることの理由が不明だからである。

主人公たちは、主人が「用意周到」で「細かいとこまでよく気がつく」と感心し、「耳にもひび予防のクリームを塗らなくてはならない」と解釈した。

他方、山猫の意図は、主人公たちに耳まで味を付けてもらふことである。

以上をまとめると、次の表になる。

表 5 第五の扉の注意書き（命令⑤、命令⑥）

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
命令⑤：壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗ってください。	様態 関係 量	室内が暖かいのでひび予防のクリームを塗って下さい。	食材の味付け：クリームを塗って味を付けて下さい。
命令⑥：クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、	量	耳にもひび予防のクリームを塗って下さい。	食材の味付け：耳にも味を付けて下さい。

(6a) 第六の扉の表の注意書きは次のように書かれてゐる。

「するとすぐその前に次の戸がありました。

『料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。』

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔のやうな匂がするのです。

『この香水はへんに酔くさい。どうしたんだらう。』

『まちがへたんだ。下女が風邪でも引いてまちがへて入れたんだ。』 34

ここで注意すべきは、主人公が「下女」に責任があると考へてゐることである。これも階級意識によるスノッブ的発話であるといへよう。また、風邪を引いて「香水」と「酔」とを間違へると考へるのは余りに荒唐無稽であるから、読者は失笑してしまふであらう。

さて、この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、全ての格率に違反してゐる。なぜなら、様態のカテゴリーでは「もうすぐ」と「できる」と「たべられます」とが多義であるからであり、質のカテゴリーでは「香水」が虚偽となつてゐるからであり、関係のカテゴリーと量のカテゴリーでは「香水」を振りかけることと食事との関係が不明であり、その理由も書かれてゐないからである。

さらにその多義についていへば、まづ、「できる」といふ表現は、「可能である」といふ意味と「完成する」といふ意味とがある。次に、「もうすぐ」といふ表現は、「もうすぐ」といふ場合と「もう、すぐ」といふ場合と二つある。前者は「まもなく」といふ意味である。後者は、『注文の多い料理店』の「序」の次の一節、即ち、

「ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほりに書いたまです〔。〕」 7

といふ一節を参考にすると、「ほんとうにもう、アッといふ間に」といふ意味であるといへよう。あるいは文法的にいふと、前者は「もう」が副詞的に用ゐられ、後者は「もう」が感動詞的に用ゐられてゐるといへる。そして、「たべられる」といふ表現は、助動詞「られる」に可能の意味と受身の意味とがあることから、「たべることができる」といふ意味と「捕食される」といふ意味とがあるといへる。

主人公たちは料理をまだ注文してゐないことから、「もうすぐできる」といふことを「アッといふ間に調理することができる」と理解し、「たべられる」も「食べることができる」と理解した。また、香水を振りかけることは、主人公たちのマナーの中途半端な知識に適ふものであり、主人公たちは素直に従つてゐる。したがつて、「料理はアッといふ間に調理することができるので、お待たせすることはありません。すぐに食事をすることができます。頭に香水を振りかけて下さい。」と解釈した。

他方、山猫の意図は料理の味付けをすることであり、料理が完成に近づいてをり、完成したらすぐに捕食するつもりであつて、早く頭に酔をかけてほしいといふことである。

(6b) 第六の扉の裏の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「二人は扉をあけて中に入りました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

『いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

んよくもみ込んでください。』

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどといふこんどは二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん塗つた顔を見合せました。

『どうもおかしいぜ。』

『ぼくもおかしいとおもふ。』

『沢山の注文といふのは、向ふがこつちへ注文してるんだよ。』

『だからさ、西洋料理店といふのは、ぼくの考へるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とかういふことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。』がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言へませんでした。」 34

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「いろいろ」と「うるさい」と「お気の毒」とが多義であるからである。

まず、「いろいろ」は、さまざまな種類を意味する場合と多くの色を意味する場合とがある。次に、「注文」は第二の扉の表の所で引用した木原（2000）によれば、オーダーのほかに、注文書（注意書き）をも意味する。そして、「うるさい」は松村（2006）によれば、

「うるさい ②しつこくて、やりきれない。…

③小さいことまで、いちいち文句を言うのでいやだ。口やかましい。

⑤面倒くさくて、いやだ。わずらわしい。…」 250

とあり、小さいことまで口やかましく言ふことと面倒で煩はしいこととを意味する。さらに、「お気の毒」は松村（2006）によれば、

「きのどく ①相手の苦痛や困難なさまに同情して心を痛めること（さま）。…

②相手に迷惑をかけてすまなく思うこと（さま）。…」 619

とあるやうに、同情する意味と謝罪する意味とがある。

主人公たちはここで初めて自らの理解が誤つてゐたことに気がつく。「お気の毒」を「可

哀さう」と理解したことが誤解に気がつく引き金になつてゐるのである。したがつて、「いろいろ」を「色々な」と理解し、「注文」を「注意書き」と理解し、「うるさい」を「細かいことに口やかましい」と理解したと考へられる。（第五の扉の裏で「耳にもよく塗りましたか」と細かいことを注意してゐた。）したがつて、「多くの色の文字によつて書かれた注意書きが多くて細かつた」と解釈したといへよう。そして、塩をもみ込むことは「味付け」とであると理解できるようになる。この点において、主人公たちの解釈と山猫の意図とが一致するのである。

他方、山猫の意図は、最後の命令の前に、まづ注文が多くて面倒なことをさせたことについて謝罪し、最後の命令であることを告げ、塩を体にもみ込んでもらふことである。

以上をまとめると、次の表になる。

表 6 第六の扉の注意書き（命令⑦、命令⑧）

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
料理はもうすぐできます。 十五分とお待たせはいたしません。 すぐたべられます。	様態	アッといふ間に調理が可能ですので、お待たせいたしません。 すぐに食事することができます。	料理はまもなく完成します。 お待たせするつもりはないので、すぐ捕食されます。
命令⑦：早くあなたの頭に 瓶の中の香水をよく振りかけてください。	質 関係 量	香水を頭に振りかけて下さい。	酢を振りかけて味を付けて下さい。
いろいろ注文が多くてうる さかつたでせう。 お気の毒でした。 もうこれだけです。	様態	多くの色の文字によつて書かれた注意書きの数が多く、その内容も細かつたでせう。 可哀さうに思ひました。 これが最後です。	様々な命令が多くて面倒だつたでせう。 すみませんでした。 これが最後です。
命令⑧：どうかからだ中に、 壺の中の塩をたくさんよく もみ込んでください。	—	塩をもみ込んで味を付けて下さい。	塩をもみ込んで味を付けて下さい。

(7) 第七の扉の表の注意書きは次のやうに書かれてゐる。

「奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

『いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。』

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこつちをの

ぞいてゐます。

『うわあ。』がたがたがたがた。

『うわあ。』がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云つてゐます。

『だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないやうだよ。』

『あたりまへさ。親分の書きやうがまづいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。』

『どつちでもいい、よ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。』 35

この注意書きはグライスの協調の原理に従つて分析すると、様態のカテゴリーの格率に違反してゐる。なぜなら、「ご苦労」と「結構」と「できました」と「おなか」が多義であるからである。

松村（2006）によれば、

「ごくろう ①苦労を丁寧という語。…

②相手の骨折りをねぎらつていう語。

③人の努力や骨折りをひやかしたり、やや皮肉をこめていう語。…」 895

「けっこう ①すばらしくて難点がないさま。…

②満足できる状態であるさま。その状態で十分であるさま。…

③それ以上を必要としないさま。十分。…」 793

「できる ②新たに作られて完成する。…

④課せられた作業・課題や準備が完成・完了する。仕上がる。

⑨能力・可能性がある。…」 1722

とあり、これを参考にすると、「ごくろう」は皮肉をこめていふ場合とねぎらつていふ場合とがあり、「けっこう」は見事な状態と完成した状態とを意味し、「できる」は完成することと完了することとを意味するといへる。また、「おなか」はお腹と中とを意味する。

主人公たちは、「ご苦労です」を皮肉をこめていはれてゐると理解し、「結構にできました」は自分たちがこれまで全ての命令に忠実に従つたことから見事に遂行したと理解したといへよう。そして、捕食されることを想像して、胃の中に入ると解釈した。（第一の扉の表の注意書きに対して主人公は「やつぱり世の中はうまくできてゐるねえ、けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこない、こともある。」（30頁）と発話してゐる。「なんぎした」とは苦労したといふことであり、ここで主人公たちは更に難儀してゐるのである。したがつて、「いゝこと」が起きてゐないのだから主人公たちにとって「世の中はうまくできて」ゐないといへ

よう。)

他方、山猫の意図は、全ての命令に従ってもらった苦勞をねぎらひ、料理が完成したことを告げ、お客（料理）を部屋へ招き入れることであるといへよう。

以上をまとめると、次の表になる。

表 7 第七の扉の注意書き

注意書き	格率	主人公の解釈	山猫の意図
いや、わざわざご苦勞です。 大へん結構にできました。	様態	わざわざ難儀です。(皮肉) あなたは見事に命令を遂行しました。	わざわざ有難うございます。 (ねぎらひ) 料理が満足できる状態に完了しました。
さあさあおなかにおはいりください。	様態	お腹にお入り下さい。	お部屋の中にお入り下さい。

(8) 主人公たちは七つ目の扉の裏（部屋の中）から聞こえる次のやうな会話を耳にする。

『それはさうだ。けれどももしこ、へあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ。』

『呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿も洗つてありますし、〔菜〕つ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜つ葉をうまくとりあはせて、まつ白なお皿にのせる丈けです。はやくいらつしやい。』

『へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。』

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしやくしやの紙屑のやうになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。」 35

ここで注意すべきことが四つある。

第一に、山猫の子分たちが主人公たちを熱烈に「大歓迎」してゐることである。「歓迎」については第一の扉の裏の注意書きのところで既に述べたが、さらに木原（2000）によれば、「welcome〔間投詞〕ようこそ！ いらつしやい！」(1616 頁)とあるやうに、「いらつしやいませ」も意味するのである。ここでは実際に山猫の子分たちが主人公たちを「ようこそ、いらつしやいませ」と歓迎してゐるのである。したがつて、「いらつしやい」には「来る」の尊敬語「いらつしやる」の命令形としての意味と「ようこそ」の意味とがあるといへよう。(いふまでもなく、「いらつしやい」は店先での客への呼び込みの掛け声である。)

第二に、ここで初めて主人公たちが「サラダ」にされてゐることが判明することである。松村（2006）によれば、

「サラダ 生野菜をドレッシングやマヨネーズであえたものを基本に、果物やゆでた卵・ジャガイモやハム・肉などを加えた料理。サラダ。」1030

とあり、また、井上・赤野（2007）によれば、

「salad【語源は「塩味（salt）を付けたもの」；sauce, sausage と同源】」1579

「salad cream（英）サラダクリーム（マヨネーズがベースのドレッシング）」1579

とあるやうに、もともとサラダは野菜に「塩」味を付けた料理である。さうすると主人公たちはサラダに加へられる肉といふことになる。

第三に、山猫の子分たちが主人公たちにメニューのオーダーを聞いてゐることである。つまり、どのやうにして捕食されるかのメニューとして、主人公たちに「サラダにしますか、それともフライにしますか」と聞いてゐるのである。

第四に、「あげる」が多義になつてゐることである。「フライにして揚げる」と「フライにして差し上げる」といふ意味である。

(9) その後、主人公たちは救出され、東京へと帰つてゆく。

「そしてうしろからは、

『旦那あ、旦那あ、』と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

『おゝい、おゝい、こゝだぞ、早く来い。』と叫びました。

蓑帽子をかぶつた専門の猟師が、草をざわざわ分けてやつてきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そして猟〔師〕のもつてきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買つて東京に帰りました。

しかし、さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはいつても、もうもとのとほりになほりませんでした。」37

ここで注意すべきことは二つある。

第一に、主人公たちが助けに來た猟師に「早く来い」と命令口調で叫んでゐることである。これも階級意識の反映であらう。

第二、主人公の顔が「くしやくしや」の紙屑のやうになつたままであることである。これはクリームと似た発音のクリーズ（英和辞典ではクリームの後の単語）と関係があると思はれる。即ち、井上・赤野（2007）によれば、

「crease 〔名〕①（布・顔などの）しわ；（ズボン・スカートなどの）折り目、ひだ

…

〔動〕③〈人〉を大笑いさせる」426

とあり、また、羽鳥（2000）によれば、

「crease 〔名〕（布・紙などの）しわ；（ズボンなどの）折り目、ひだ。＞皮膚に用いると wrinkle より深い「しわ」。」346

とあるやうに、クリーズは深い皺を意味する。つまり、クリームの流れ落ちた顔にはクリーズが残されてゐるのである。

（10）以上で分析と解釈を終へるが、「注文」の意味と主人公たちの発話と作品の舞台である「山猫軒」とについて整理しておく。

まず、「注文」についてであるが、既に英語の order については引用したが、日本語については松村（2006）によれば、

「ちゅうもん ①品質・数量・形式・価格などを指定して、品物の製作・配達・送付などを依頼すること。また、その依頼。あつらえること。…

②依頼したり選んだりする時、先方にこちらの希望を示すこと。また、その条件。…

③書き付け。書状。…」1633

とある。これらを総合すると、この作品において「注文」には次のやうな意味があるといへる。第一に、希望するものの条件を意味する。「肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」と山猫がお客の条件を提示してゐる。

第二に、メニューのオーダーをすることを意味する。主人公たちはこの料理店が繁盛してゐると考へ、多くのオーダーがあると思へた。また、山猫たちは「それともサラダはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。」とオーダーを聞いてゐる。

第三に、注文の料理を意味する。「サラダ」と「フライ」である。

第四に、注意書きを意味する。それぞれの扉に色を変へて書かれた注意書きである。

第五に、命令を意味する。主人公たちは山猫の指示に従って料理（サラダ）にされてゐる。このやうに、この作品は〈「注文」の意味が多い童話〉であるといへよう。

次に、主人公たちのスノッパ的発話を、(1) 地位（社会的階層意識および田舎に対する都会の優位意識）に関するものと(2) 財産に関するものと(3) 知識に関するものとに分類する。それを表にして一覧すれば、次のやうになる。

表8 スノッパ的発話

地位	○君、ちやうどいい。こゝはこれでなかなか開けてるんだ ○なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。 ○僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ ○作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。 ○いや、よほど偉いひとが始終来てゐるんだ。 ○たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは ○どうも奥には、よほどえらいひとがきてゐる。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。 ○下女が風邪でも引いてまちがへて入れたんだ。 ○おゝい、おゝい、こゝだぞ、早く来い。
財産	○じつにぼくは、二千四百円の損害だ ○ぼくは二千八百円の損害だ。 ○山鳥を拾ひも買つて帰ればいい。 ○このうちは料理店だけれどもたゞでご馳走するんだぜ。
知識	○これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなかうさ。 ○なるほど、鉄砲を持つてものを食ふといふ法はない。 ○は、あ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気のものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯う云ふんだらう。 ○これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖かいとひびがきれるから、その予防なんだ。

そして、「山猫軒」は「立派な一軒の西洋造りの家」(29 頁)であり、「玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。」(30 頁)とあるやうに、主人公たちがスノッパ性を存分に発揮する舞台として相応しいものである。主人公たちは、物質的な財貨に眩惑されて山猫たちの餌食となるのである。主人公たちが目にする「立派な」財貨を表にして一覧すれば、次のやうになる（不明の場合は？を記し、存在しない場合は－を記す）。

表 9 財貨

	扉	文字の色	調度品
第一の扉	硝子の開き戸	金文字	—
第二の扉	水いろのペンキ塗の扉	黄いろな文字	—
第三の扉	？	赤い字	鏡, 長い柄のついたブラシ, 黒い台
第四の扉	黒い扉	？	黒塗りの立派な金庫
第五の扉	？	？	硝子の壺, ちいさなクリーム壺
第六の扉	？	？	金ピカの香水の瓶, 立派な青い瀬戸の塩壺
第七の扉	大きなかぎ穴が二つ, 銀いろのホークとナイフの形	—	—

5. をはりに

本稿の分析によつて、この童話が複雑な言語表現によつて構成されてゐること、またスノビズムへのカリカチュアがなされてゐることを明らかにした。したがつて、この童話は賢治一流のギャグを満載した童話であるといへよう。

なほ、本稿では童話集『注文の多い料理店』の中での位置づけや他の童話との関係などについては論じてゐない。また、賢治の言語的特徴とされる擬音語や方言などについても論じてゐない。それらについては今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

- 宮沢賢治（1995）『【新】校本 宮沢賢治全集 第十二巻』筑摩書房（原著 1924）
- 宮沢賢治〔著〕ジョン・ベスター〔訳〕（2001）『注文の多い料理店 The Restaurant of Many Orders』講談社
- ◇
- 天沢退二郎〔編集〕（1994）『新潮日本文学アルバム 宮沢賢治』新潮社
- 草山万兎（2011）『宮沢賢治の心を読む（Ⅰ）』童話屋
- 小森陽一（1996）『最新 宮沢賢治講義』朝日新聞社
- 関口安義（2008）『賢治童話を読む』港の人

- 千野栄一（1986）『注文の多い言語学』大修館書店
中野由貴（1996）『宮澤賢治のレストラン』平凡社
ポール・グライス〔著〕清塚邦彦〔訳〕（1998）『論理と会話』勁草書房（原著 1989）
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
山下正男（1985）『論理的に考えること』岩波ジュニア新書
◇
井上永幸・赤野一郎〔編集〕（2007）『ウィズダム英和辞典 第2版』三省堂
木原研三〔監修〕（2000）『グランドセンチュリー英和辞典』三省堂
小西友七・南出康世〔編集主幹〕（2001）『ジーニアス英和辞典 第3版』大修館書店
羽鳥博愛〔編〕（2000）『ニューヴィクトリアンカー英和辞典』学習研究社
松村明・三省堂編集所〔編集〕（2006）『大辞林 第三版』三省堂

（2013年9月26日 受理）